

## 「やり取り」が求める力とその指導

著者	伊東 武彦
雑誌名	Otsuma Review
巻	52
ページ	65-78
発行年	2019-07-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1114/00006733/">http://id.nii.ac.jp/1114/00006733/</a>

## 「やり取り」が求める力とその指導

伊 東 武 彦

### 1. はじめに

中学校学習指導要領外国語編（平成 29 年告示）、ならびに高等学校学習指導要領英語・外国語編（平成 30 年告示）において、従来の「話すこと」の領域は「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」に分けられることになった。

これは、CEFR の指針に合わせるために取られた措置である。ヨーロッパ評議会は、「話すこと」(speaking) は、「発表」(presentation) と「やり取り」(interaction) の 2 つの領域から構成されると考える。しかし、今回の学習指導要領の「やり取り」の新設に際して、それが我が国の英語教育にもたらす意義と目的が十分に説明されているとは言い難い。また、指導事例も示されていない。「やり取り」は何のために新設され、いかなる指導によってどのような能力を育てることをめざすのか。

CEFR への準拠は国際的な潮流ではある。しかし、日本語と英語のコミュニケーションには「やり取り」の点で大きな相違が存在し、それに対する考察を欠いたまま英語の「やり取り」を指導するならば、模倣のための練習に終始する危険性が高い。「やり取り」における両者間の相違は、日本語文化と英語文化の本質に関わり、それに対する洞察を通して初めて教師は指導の手がかりを掴むことができるであろう。

日本語話者と英語話者は、ターン・テイキング (TT) の点で大きく異なる (Ito, 2015)。英語の会話の方が日本語の会話より発展性が高く、それは前者が相手からの反応を誘発する発言をより多く含み、さらに聞き手と話し手の役割が頻繁に交替するからである。詳しくは 3 章で述べるが、こうした両言語の TT に潜む本質的な違いは、残念ながら我が国のほとんどの英語教育者にとって盲点である。「やり取り」とは TT と同義であり、日本語話者と英語話者の TT の違いを理解することによって、日本語会話の TT 様式に馴染んだ日本人英語学習者に、英語の TT 様式を効果的に指導することが可能になる。

本稿では、(1) 新領域「やり取り」がめざす力を、学習指導要領、CEFR から明らかにし、(2) 日本語話者と英語話者の TT 様式の違いを先行研究に基づいて示し、(3) 「やり取り」の力を高める指導事例を紹介する。

## 2. 「やり取り」がめざす力

学習指導要領と CEFR から「やり取り」がめざす力とは何かを探る。

### 2.1 目標

「話すこと [やり取り]」の中学校における目標を、文部科学省 (2017a: 145) は次のように示している。

- ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする。
- イ 日常的な話題について、事実や自分の考え、気持ちなどを整理し、簡単な語句や文を用いて伝えたり、相手からの質問に答えたりすることができるようにする。
- ウ 社会的な話題に関して聞いたり読んだりしたことについて、考えたことや感じたこと、その理由などを、簡単な語句や文を用いて述べ合うことができるようにする。

(下線は筆者による)

高等学校「英語コミュニケーション I」における「話すこと [やり取り]」の目標を、文部科学省 (2018: 217) は次のように示している。

- ア 日常的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを伝え合うやり取りを続けることができるようにする。
- イ 社会的な話題について、使用する語句や文、対話の展開などにおいて、多くの支援を活用すれば、聞いたり読んだりしたことを基に、基本的な語句や文を用いて、情報や考え、気持ちなどを論理性に注意して伝え合うことができるようにする。

(下線は筆者による)

両者から「やり取り」については、以下の4点が明らかになる。

- 1) あらかじめ準備をしない（「即興で伝え合う」）
- 2) 双方向の言語活動（「伝えたり、相手からの質問に答えたりする」）
- 3) 日常的な話題と社会的な話題について、情報、考え、気持ちを伝え合う（「日常的な話題」、「社会的な話題」、「情報や考え、気持ち」、「伝え合う」）
- 4) 話し手と聞き手の立場は交替する（「述べ合う」、「伝え合う」）。

『学習指導要領解説』を読むと、「やり取り」の趣旨はより明確になる。文部科学省（2017b: 22）は、「やり取り」の新設を次のように説明する。

「話すこと [やり取り]」は、今回の改訂で新たに設定された領域である。「話すこと」の言語活動では、日常の会話から討論に至るまで、話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向でのコミュニケーションの機会が多いことを踏まえ、後述する（4）の「発表」とは別に「やり取り」を加え、その目標を設定した。

（中略）

やり取りを行う際は、相手の発話に応じることが重要であり、それに関連した質問や意見を述べたりして、互いに協力して対話を継続・発展させなければならない。

（下線は筆者による）

ここでは、「やり取り」の新設は「話し手と聞き手の役割を交互に繰り返す双方向でのコミュニケーション」に備えるためであること、また「やり取り」においては、「互いに協力して対話を継続・発展させなければならない」と述べ、「やり取り」を言語能力（文法力、語彙力、発音の力など）とは一線を画した力としてとらえて、双方向の発展的会話様式の習得を目標とすると明示している。このことは、従来の日本の英語教育では扱われてこなかった新しい視点が導入されたことを意味している。

## 2.2 CEFR

文部科学省が「やり取り」を新設した背景には CEFR（Common European Framework of Reference for Languages）の影響力拡大がある。CEFR とは、Council of Europe が、外国語学習者の言語運用能力を客観的に示すために

作成した国際標準規格であり、これを学習者と教育者が共有することによって外国語の熟達度を同一基準で判断しながら学習と教育ができるように開発されたものである。

Council of Europe (2004: 14) は、やり取り (Interaction) は「言語使用と言語学習の中でも通常大きな重要性が認められている。それはやり取りがコミュニケーションにおける中核的役割を果たしている」と考えるからだ。そして、Council of Europe (2004: 28) は自己評価表において「やり取り」を、「表現」と共に「話すこと」の下位区分として設定している。

理解すること		話すこと		書くこと
聞くこと	読むこと	やり取り	表現	書くこと

表 1 自己評価表の 5 領域

また、Council of Europe (2004: 30) は、話し言葉の質的側面は、「やり取り」を含む 5 項目から評価されると考える。

使用領域の幅	正確さ	流暢さ	やり取り	一貫性
--------	-----	-----	------	-----

表 2 話し言葉の質的側面の評価項目

Council of Europe (2004: 77) は、「やり取り」を「相互行為活動」と規定して話し手と聞き手の協同性を重視する。また、Council of Europe (2004: 141) が相互行為活動の具体例として示した活動は、以下に見るように、目的、場面、フォーマリティの点で多様であり、人間の口頭における言語行為を網羅する。

「相互行為活動では、言語使用者は、話し手と聞き手を交互に務めながら、一人以上を相手に、協調の原則に従って、意味の交渉を行いながら、相手と協同して会話を形作っていく。」

相互行為活動には次の例が挙げられる。

取引、打ち解けた会話、非公式の議論、公式の議論、ディベート、インタビュー、交渉、協同計画、目的達成のための実際的共同作業

「やり取り」がめざす力とは何であるかを学習指導要領と CEFR から探ってきた。「やり取り」が言語学上の用語 *turn-taking* (以下, TT) すなわち話者の交替を意味することは明らかであろう。決定打は, Council of Europe (2004: 141) が示す「言葉のやり取りのスキーマ」である。そこには次のように説明されている。

やり取りのコミュニケーション活動では, その場の参加者が構造化された一連の行動を順番に行う。最も単純な場合, 以下のような発言の組み合わせを成す。

質問 vs 答え, 叙述 vs 賛成／反対, 要求／申し出／謝罪 vs 受諾／拒絶, 挨拶／乾杯 vs 返礼

ここに挙げられた「発言の組み合わせ」とは, 次章で述べる隣接ペアに他ならない。隣接ペアは TT の主要概念であるので, 「やり取り」とは TT の同義語であると判断することができる。

### 3. ターン・テイキング

TT とは話者の交替を意味する。TT の様式において日本語話者と英語話者には相違が見られる。TT のメカニズムを説明した後で, 相違の概略を述べる。

#### 3.1 メカニズム

TT のメカニズムの説明のために隣接ペアの概念を用いる。隣接ペアとは, 異なる話者による 2 つの連続した発話のことである。第 1 の発話は第 2 の発話を誘導し, 第 2 の発話は第 1 の発話への応答となる。隣接ペアは, question-answer, invitation-acceptance/decline, compliment-acceptance/denial など多様である。question は第 2 の発話として answer を, invitation は acceptance あるいは decline を誘導する。以下は, Richards & Shmidt (1985) が示す例である。

question-answer

A: Where the book I bought this morning?

B: On the table.

invitation-acceptance

A: I am having some people to dinner Saturday. And I would really like you to come.

B. Sure.

第1の発話を first-pair-parts (以下, FPP), 第2の発話を second-pair-parts (以下, SPP) と呼ぶ。FPP は, SPP を誘導する起点として機能する。そこで, FPP を会話を維持し発展させるストラテジーとして定義する。

FPP のストラテジーは多数存在する。映画 *Before Sunrise* の冒頭, Jesse と Celine の出会いの場面における会話に基づいて, 6 種類のストラテジーを説明する。これらは英語会話に特徴的なストラテジーである。

(1) *Bonus information*

Jesse: So where are you headed?

Celine: Well, back to Paris. My classes start next week. (1)

Jesse: You're still in school? Where do you go?

Celine: Yeah, Sorbonne, you know?

Jesse: Sure. You are coming from Budapest?

Celine: Yeah. I was visiting my grandmother. (2)

Jesse: How is she?

Celine: She's okay.

ヨーロッパの長距離列車の車内で偶然出会った Jesse と Celine の会話の抜粋である。Celine の目的地を尋ねた Jesse の最初の質問に対する答えは, “back to Paris” であるが, 彼女は自発的に下線部 (1) の情報を付け加えて自分が学生であることを示唆する。この種の情報は bonus information (BI) と呼ばれる。この BI は Jesse からの質問 “You're still in school? Where do you go?” を誘導する。BI は, 相手の反応や質問を喚起して話題を発展させる機能を持つ。下線部 (2) の文も Celine によって自発的に追加された BI で, Jesse からの新たな質問を誘導して会話を発展させている。

(2) *Return question*

Jesse: She is all right?

Celine: She is fine. How about you? Where are you going? (3)

Celine はそれまで Jesse からの質問を受けてきたのだが、下線部 (3) の質問によって Jesse に質問し返す立場に立つ。その結果 Jesse は、質問する立場から答える立場に転換する。この種の質問は return question (RQ) と呼ばれる。“And you?” や “How about you?” は最も頻繁に用いられる RQ である。

(3) *Follow-up question*

Jesse: I'm going to Vienna.

Celine: Vienna? What's there? (4)

Jesse: No idea. I'm flying out of there tomorrow.

Celine: You're on holiday? (5)

Jesse: I don't really know what I'm on. I'm just traveling around. I've been riding the trains the past two, three weeks.

Celine: You are visiting friends or just on your own? (6)

下線部 (4), (5), (6), (8), (11) は、話題を深く掘りさげる機能を持つ。これは follow-up question (FQ) と呼ばれ、その話題に留まってそれについて会話を発展させようとする意図を示す。

(4) *Reaction*

Jesse: Yeah, I had a friend in Madrid, but...

Celine: Madrid, that's nice. (7)

Jesse: Yeah, I got one of those Eurail passes, is what I did.

下線部 (7) は、Jesse が自分の旅の説明で与えた情報 “Madrid” に対する Celine の reaction (R) である。R は相手の発話に対する反応であり、それはここに示されるようにさらに相手からの発言を誘導しうる FPP となる。



(5) *Clarification request*

Celine: That's great. So has this trip around Europe been good for you? (8)

Jesse: Yeah, sure. It's been ... It sucked

Celine: What? (9)

Jesse: It's had its... Well, I'll tell you sitting for weeks on end looking out the window has actually been kind of great.

Celine: What do you mean? (10)

Jesse: Well, you know, for instance, you have ideas that you originally wouldn't have.

下線部 (9) と (10) は, clarification request (CR) と呼ばれる。CR は, 相手の意図が不明確な時に相手に明確化を求める時に用いられ, 会話を維持させる機能を持つ。

(6) *Topicalization*

Celine: What kinds of ideas? (11)

Jesse: Want to hear one?

Celine: Yeah, tell me.

Jesse: All right. I have this idea, okay? (12)

Celine: (nod)

Jesse: For a television show. Some friends of mine are cable-access producers. Do you know what that is, cable access?

Celine: No.

Jesse: Anybody can produce a show real cheap and they have to put in on.

下線部 (12) は topicalization (T) と呼ばれ, それまで続いていた話題を終了し, 新たな話題への移行を意図する。ここでは, Jesse は旅行中に思いついたアイディアを Celine に聞いてもらいたいと思っている。T は, 新たな話題を設定して会話を維持・発展させる機能を持つ。

## 3.2 日本語と英語における turn-taking の相違

TT 様式は, 日本語話者と英語話者で異なる。日本語と英語の計 10 本の映

画における主要登場人物の男女の出会いの会話分析から、以下の4点が明らかになった (Ito, 2015)。

- 1) 一連の会話における隣接ペアの数は、英語映画の方が日本語映画より多い。FPPの出現頻度においても英語映画は日本語映画より高く、英語映画における会話は日本語映画における会話よりも維持され発展性が高い。
- 2) FQ, BI, Tは、日本語と英語の双方の映画において高頻度で現れるFPPである。
- 3) 主要登場人物の男女のFPP使用における均衡性は、日本映画は英語映画よりも低い<sup>1</sup>。
- 4) 日本語映画では、SPPが生じないことがある。すなわち相手のFPPに対して無言を貫くことがある。この現象は、日本語会話が英語会話に比べて発展性を欠く原因の一因である<sup>2</sup>。

上記4点の相違点は、会話において日本語話者は英語話者とは異なるTTを取ることを意味する。外国語を使用する際の母語の転移は、文法、語彙選択、発音、語用論など様々なレベルで観察される。当然ながらTTの様式も転移し、日本人英語学習者は英語でやり取りする際にも日本語会話におけるTTの特徴を表すはずである。日本人英語話者によるやり取りにはFPPが少なく、話し手もしくは聞き手の立場に固定しがちで会話者間のFPP使用における均衡を欠くので双方向の会話が成立しにくくなり、SPPの不在も見られる。これらは、英語会話において発展性の低下を招く要因となり得る。

英語会話において有能な参加者になるためには、日本人英語学習者はこれまで英語力として考えられてきた知識や技能を身につけるだけでなく、まずは日本語話者と英語話者のTT様式における違いを認識すること、次に英語のTT様式の特徴を学ぶことが必要である。

### 3.3 相違を生む文化的要因

日本語話者と英語話者のTT様式の違いを生み出す要因の一つは、子どもが受けるコミュニケーション教育にあると思われる。

英語文化で育つ子どもはどのような教育を受けているのだろうか。それを探るために、*The Essential 55*を取り上げる。本書には、アメリカにおけるコミュニケーション教育の具体例が示されている。著者のClarkは、2001年にディ

ズニーが選ぶ全米最優秀教師に選ばれた小学校教師である。Clark (2003: 16, 116) が提案する「ルール」には、TTのストラテジーに関するものがある。

Rule 6 If you are asked a question in conversation, ask a question in return.

Rule 39 On a field trip, compliment the place you are visiting. If you visit someone's home, it would be a nice gesture to tell them that you think they have nice curtains.

Rule 6は文字通り Return Question であり、Rule 39はTopicalizationで、カーテンについての会話が始まることになる。

本書は、アメリカでベストセラーになり、具体的な練習方法を示したワークブックまで出版されている。このことは、アメリカでは多くの人々が彼の考えに共感を寄せていることを意味する。つまり、子どもにこのような教育をすることに支持が集まり、実際に彼らはこの教えに沿ってトレーニングを積んでいると考えられる。

それに対して、日本の子どもはコミュニケーションについてどのように教えられているのだろうか。日本のコミュニケーション教育の具体例として『小学生までに身につけるこどもの作法』を取り上げる。著者の野口は小学校教諭として長年の勤務経験を持つ点が Clark と共通する。野口 (2006: 83) は来客への対応の仕方を次のように述べている。

子どもが目上の人に話す時は、ていねい語が基本。質問された時は、まずはじめに「はい」「いいえ」で答える。(来客があったら) 大人の会話に口をはさむようなことは避け、挨拶をしたらさっと引きあげるように教えておきます。

本書が強調しているのは、子どもとしての立場をわきまえて大人に対する礼儀を重んじること、そして丁寧なコミュニケーションを心がけることだ。例えば、おじいちゃんやおばあちゃんに「たかしくんはいくつになった?」と聞かれた時は? 「8歳になったよ!」。隣の家のおばさんに「たかしくんはいくつになったの?」と聞かれたら? 「先月で8歳になりました。」(pp.

51-52) と答えるように教えている。

TT の視点で Clark と野口を比較すると、Clark は FPP を発するする方法、つまり会話での能動的役割について述べているのに対して、野口は相手が発した FPP にどう応じるべきか、すなわち受動的役割について述べている。Clark と野口に見るこの指導内容の違いは象徴的である。日本とアメリカの間には子どもへのコミュニケーション教育に違いがあることは明らかで、それが TT 様式の違いを生む一因となることが予想される。

## 4 指導

学習指導要領には「やり取り」の具体的活動についての言及がなく、教師は指導に役立つ情報を得ることができない。TT のストラテジーを活用する力を高めるために筆者が考案した活動例と、教科書に取り上げられた先行事例を紹介する。

### 4.1 turn-taking のストラテジー活用のための活動例

#### (1) bonus information トレーニング

質問に対する答えと bonus information はワンセットで教える。

例 A : What food do you like?

B : (I like Japanese food.) (I go to sushi bar once a week.)  
\_\_\_\_\_線部が BI

A : Where is your hometown?

B : ( ) ( )

#### (2) follow-up question トレーニング

相手が語った内容を深く掘り下げる質問をする。

例 A : I went to the movies last weekend.

B : (What movies did you see?) ( ) 内が FQ

A : I had wonderful summer holidays.

B : ( )

## 4.2 教科書の先行事例

### (1) フィンランドの小学校英語教科書

小学校4年生用 *Wow! study book 4*<sup>3</sup> を取り上げる。主人公の Chris が Ed に初めて会う場面。スケートボードに乗っている Ed は Chris にぶつかりそうになる。

Chris: Wow!

Ed: I'm really sorry

Chris: No problem.

Ed: Who are you? Are you a tourist?

Chris: Oh, no. I'm Chris. I'm new here. Hello.

Ed: Where are you from?

Chris: Finland. And you?

Ed: I'm from here. From Windsor.

Chris: What's your name?

Ed: Ed! I like skateboarding. What about you?

Chris: I don't like it. My favorite sport is football.

Ed: Nice to meet you, Chris!

Chris: You too, Ed!

Ed: See you later!

Chris: See you!

(下線は筆者による。~~~~~は return question, \_\_\_\_\_は bonus information を示す)

TT のストラテジーが会話の中に自然に織り込まれ、英語会話の発展のさせ方を例示している。

### (2) 日本の中学校英語教科書

英語会話の TT の特性を踏まえたスキットを会話教材として示す教科書がある。*New Crown English Series*<sup>4</sup> は、中学2,3年の教科書で「会話を続けよう」、「会話を広げよう」とタイトルをつけた活動を掲載している。

Raj: Where have you been in this town?

Meiling: I've been to the art museum.

(+1) I saw a lot of *ukiyoe* there. (一言追加しています)

Raj: That sounds interesting.

(+1) How was it? (詳しい説明を求めています)

「一言追加しています」は bonus information, 「詳しい説明を求めています」は follow-up question のストラテジーを指す。惜しいことに、ここには日本語会話との比較に基づく英語会話の TT の特性に関する説明がない。それがあれば、この活動の意義が教師と生徒に伝わるであろう。

## 5. 結論

「やり取り」は「ターン・テイキング (TT)」と同義である。日本語話者と英語話者の TT 様式には相違がある。日本人が英語を使う時は馴染んだ日本語の TT 様式を当てはめるため、英語話者とのコミュニケーションに支障を来す可能性がある。指導方法と教材は未整備だ。指導に当たっては、教師と学習者の双方が英語の TT 様式についての知識と理解を深めた上で適切な活動に従事することが重要である。

TT 様式の違いは文化に根差す。それぞれの文化で身につけた TT 様式は単なるテクニックではなく、人格の一部分となると言っても過言ではない。したがって日本語話者に英語話者の TT の仕方を指導することは、人格変容を迫る要求だとの考え方もあるだろう。そもそも外国語使用は人格変容を伴う行為である。英語の TT 様式を学ぶことは母語とは異なる自分を体験する機会となり、それは英語文化への同化ではなく、もうひとりの自分を育てる機会、すなわちアイデンティティを拡大させる契機となるだろう。

## 注

- 1 均衡性が低いとは、2人の主要登場人物のどちらか一方が話し手で他方が聞き手の役割を取り続けてその役割が頻繁に交替しない結果、会話に発展性が欠けることを意味する。均衡性が高いことを左右対称、低いことを左右非対称と言い表すこともできる。
- 2 これについて西光義弘 (2017: 6) は、「日本語では英語と比べると働きかけ

に対する反応をすることに関してそれほど義務的ではない」と述べて、英語会話における義務的反応の例を、映画 *When Harry Met Sally* と *Four Weddings and a Funeral* で示している。

- 3 フィンランドは小学校3年生から英語教育を開始する。著者は Westlake 他, 2009 年, WSOY 社。この引用は P8, 9 から。
- 4 著者は根岸雅史他, 2015, 三省堂。引用は3年用教科書 p.30 から。

### 参考文献

- 三省堂 (2016) *New Crown English Series 3*, p.30
- 西光義弘 (2017) 「語用論から異文化間コミュニケーションへ：語用論統合モデルに向けて」『商学論究 (関西学院大学)』64 (6), 1-19.
- 野口芳宏 (2006) 『小学生までに身につけるこどもの作法』PHP 研究所
- 文部科学省 (2017a) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示)』  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1413522\\_002.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1413522_002.pdf)
- 文部科学省 (2017b) 『中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 外国語編』  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_010.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_010.pdf)
- 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領 平成 30 年告示』  
[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661\\_6\\_1\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/07/11/1384661_6_1_2.pdf)
- Clark, R. (2003) *The Essential 55: an award-winning educator's rules for discovering the successful student in every child*. Hyperion.
- Council of Europe (吉島茂, 大橋理枝 翻訳) (2004) 『外国語教育〈2〉外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠』朝日出版
- Ito, T. 2015 “Analyzing Turn-Taking Behavior in Japanese and English Films” *Journal of Intercultural Communication* No.18, 35-48.
- Richards, J.C., & Schmidt, R.W. (1985). *Longman dictionary of applied linguistics*. London: Longman